

南砺市文化芸術振興実施計画第2回策定委員会 議事録

日 時：令和2年11月5日（木）16時～17時30分

会 場：南砺市役所 福光庁舎本館 302会議室

出席者：古池委員長、松本副委員長、安嶋委員、川合委員、杉本委員（水落委員代理）、
舟岡委員、片岸委員、高坂委員、野村委員、村上委員、此尾委員、向井委員、
前川委員、川田委員
（事務局）長岡課長、山本係長、米、上水

1. 開会

2. 委員長あいさつ

委員長：自分は今、名古屋市の文化振興計画策定にも携わっており、そちらでもコロナの影響をどう受け止めるかというのが大きなテーマとなっている。名古屋の場合は都市部なので、どちらかというとコロナを経済問題として課題を処理する側面が大きいですが、南砺市の場合はコミュニティに根差した問題としてどう解決していくかと捉える必要がある。計画書の作りも哲学的になっている。そういったことも（本日の議事である）計画案に盛り込まれていると思う。それもふまえて、今ある課題にどう取り組んでいくべきか、皆様からご意見をいただき、より良い計画を作っていきたい。本日はよろしくお願ひします。

3. 議事

（資料1について、事務局より説明）

委員：“Ⅱ. 現状と課題”の中の“5. SDGs（持続可能な開発目標）と文化芸術の関わり”、“6. 新型コロナウイルス感染症による「新しい生活様式」との共存”は全く新しい項目である。過去の計画とどう違うのか、現状をどのようにふまえているのか、何故この項目に今後取り組んでいく必要があるのか、もう少し詳細な説明をしてほしい。

事務局：“5. SDGs（持続可能な開発目標）と文化芸術の関わり”について、南砺市は2019年7月に「SDGs未来都市」に選定された。文化とSDGsは一見結び付きがないように思えるが、SDGsの中身を詳細に見てみると色々なものが含まれており、“持続可能な開発”という部分には文化も含まれてくる。（原稿案）本文中にも「文化の担い手・後継者を育成することなども『持続可能な開発』に結び付く取組であり、本計画を推進していくことはSDGsの達成にも結び付いていくと言えます。」と記載している。実施計画の方でも、文化の担い手・地域を持続させていくという話も出てくるが、そういう関連があるためSDGsに関する項目を基本計画に盛り込んだ。

“6. 新型コロナウイルス感染症による「新しい生活様式」との共存”について、

第 1 回策定委員会の時に田中市長より、新しい生活様式の中から南砺式というものが生み出せないかという話があった。何かしら方向性だけでも盛り込めないかと考えている。その話を推進ワーキング会議でも議題としたが、なかなか具体的な話までには至らなかった。ただ、基本計画には何か記載しておくべきだろうということで、今回新たに項目を追加した。(原稿案)本文中 9～13 行目「身体的には離れているけれど…略…文化芸術活動に取り組んでいく必要があります。」という部分に特に盛り込んでいる。今年、獅子舞など多くの行事が中止となったが、「来年はぜひやりたい」「やるにはどうしたら良いか」ということも推進ワーキング会議で話していた。それにつなげていくということで、基本計画に盛り込んだ次第である。

副委員長：基本方針の『^{ゆい こうりやく}結（合力）』の力を『^{ネットワーク}結ぶ力』に」というキャッチフレーズには“結”という字が二つ並んでおり、“結の力”と“結ぶ力”、一文字違うだけで、同じことなのではないか。これから第 2 期に入っていくこの機会に、推進ワーキング会議にて何か新しいキャッチフレーズを考えたらどうか。第 1 期ではこのキャッチフレーズに違和感がなかったが、今改めて見てみると、この計画にじっくり来ていないように感じる。南砺市が何を目指していくのかということが、このキャッチフレーズでは（分かりづらい）。例えば、総合計画では「誰ひとり取り残さない 誰もが笑顔で暮らし続けられるまちへ」という新しいキャッチフレーズが出来たが、それともあまりリンクしない。“結”は「助け合う」という意味で昔から使われてきたが、“結”や“土徳”というのは南砺市の特徴的な文化風土、あるいは生活風土である。今我々が議論している文化や芸術を伸ばしていくという意気込みが、前に出てこないように感じる。総合計画のキャッチフレーズや SDGs の理念、一流の田舎というフレーズなどをふまえた上で、推進ワーキングメンバーの方でもう一度考えてみてもらいたい。

“Ⅱ. 現状と課題”について、獅子舞や左義長などをやめている集落が増えてきている。昔は左義長で正月の飾りなどを焼いていたが、最近では子どもの書初めを焼くことに特化してしまい、子どものいない家庭が左義長に参加しなくなった。子どもが少なくなったことで、色々な行事の運営に危機が訪れている。“現状と課題”の部分から「子どもが減少し、祭りの担い手もおらず、困難な時代に入りつつある」という危機感があまり感じられず、記述としては弱いように思う。そのような現状と課題に対して、今後 5 年間どのように取り組んでいくか、行事が崩れていくのを阻止しなくてはいけないという観点の記述をしてほしい。この機会に、厳しい現実を強く訴えかける必要があると思う。

5.6 ページに、文化的資源が表に羅列して記載されている。城端、福光は民藝運動の発祥の地であり、柳宗悦が城端で「美の法門」を執筆したことをベースにして、棟方志功や河井寛次郎、濱田庄司などが集まって、そこから民藝運動が全国に広まっていった。今、それをアピールしていこうと、光徳寺も含めて頑張っているところ。城端、福光が民藝運動の発祥の地だということ、棟方志功、

柳宗悦によって活発化したのだという伝承は、南砺市にとって大事なキーワードになる。美術なのか伝統工芸なのか（ジャンル分けは）難しいが、計画のどこかに記載してほしい。

委員：棟方志功が福光に来たのも、（光徳寺の）先代の住職たちが柳宗悦の民藝運動に共感したことから始まっている。柳宗悦や河井寛次郎、濱田庄司といったつながりが出来たことはすごく大きなことで、そこから棟方志功の来福、鈴木大拙などにも広がっていった。そういう精神的なものと文化が深くなっていったということを振り返って見直すということは、とても大事なことだと思う。

副委員長：そういうことも含めて、民藝運動に関する記述について検討してほしい。

事務局：（副委員長の）一つ目の指摘について。今回は改定ということで、キャッチフレーズについてはそのまま（修正なし）で良いだろうと、推進ワーキング会議でも特に議論を行わなかった。ご指摘の通り、計画の中身や時代も変わっているので、次の推進ワーキング会議にて改めて検討したいと思う。

二つ目の指摘について。コロナの影響もあり、最近は獅子舞や左義長などをやるところが少なくなっている。そういう危機感について記述する必要があると思う。7 ページに、文化の担い手や後継者の慢性的な不足、地域コミュニティの再構築や結の精神について記載してはいるが、地域の伝統文化という部分はあまり強くないとも感じる。改めて文章を考えたいと思う。

副委員長：7 ページに将来目標人口の図が掲載されているが、それが危機感として文章に現れてこない。それが伝統芸能にどのような影響を及ぼすか。図と文章をリンクさせ、危機感がにじみ出るような内容を考えてほしい。

事務局：考え直したものを次回の会議にて、提示したいと思う。

三つ目の指摘について。確かに棟方志功作品は表の中に載っているが、民藝運動は載っていない。棟方志功作品であれば美術のジャンルだが、民藝運動となるとそれ自体がジャンルに該当するような気もする。どのような形で記載するのが良いか、検討して修正したいと思う。

委員長：かなり本質的な議論だと思う。前回策定時も 12 ページの基本方針について色々と議論した。意図するところとしては、“結”というのは民藝を支えている“土徳”も含めて、この地に特有の強い精神風土を支えてきたもの、相互扶助的なもの。それを“結”の一言で表現した。これまで先人たちが培ってきた風土を支えてきたものを“結”と表現するのであれば、今はそれが随分弱ってきている。ここが弱ると獅子舞などを支える力がなくなってきて、このままいくとまずいことになる。コロナによって余計にそれが加速している。この伝統的な力を、今の時代や将来の時代にどのように引き継いでいくかということで、“結ぶ力（ネットワーク）”という言葉を使った。時代に応じた“結の力”をうまく引き出していくという意味で、こういうキャッチフレーズとなった。田中市長が“南砺型の文化振興”と言っていたがそれは何か、ということをやうまく表現できる言葉があれば、（キャッチフレーズを）変えた方が良い。その実態が見えて

くれば、この計画の意図するところだろう。今のところ“南砺型”の実態が見えてこないで、考えていく必要がある。

もう一点、危機感については、行政計画としてある程度一般論的に書かざるを得ないところもあると思うが、もう少し踏み込んで、深刻な側面をもっとストレートに書いても良いと思う。かなり深刻な現状だということを受け止めないと、“南砺型”にも結び付いていかないだろう。どのように記載するか、事務局と相談したい。

委員：城端絹と福光麻はセットで話されることが多いが、6 ページの伝統工芸の欄には福光麻が載っていない。もう廃れてしまい、あまり作られていないから（記載しない）という見解なのか。自分の力だけではどうにもならないが、何らかのサポートがあれば復活させたい、という声もある。是非とも記載してほしい。また、刈安（五箇山の茅）で染物をやったことがある。こういったことも新しい試みとして、染物として位置付けて育てることが出来ないかと考えている。ここに記載するに値するか、検討してほしい。

先ほど副委員長も話しておられたが、棟方志功を市民や全国に向けて、もっと周知すべきである。以前、名古屋で懇談した際、「福光に棟方志功という世界的に素晴らしい版画家がいたのに、なぜもっと全国的、世界的に PR しないのか。なぜもっと大々的に、南砺市として売り込みを展開しないのか」と指摘を受けたことがある。作品として美術館で展示されているが、文化というくくりで言えば物語が大事。物語の中で PR を行い、実際に作品を見てもらうということが大事になる。例えば棟方志功の福光時代、棟方志功とだまし川など、地域をあげて取り組んでいる。もっと大々的に活かして進めていってほしい。

8 ページに「劇団 SCOT による市民鑑賞会の実施」という記載が追加されている。劇団 SCOT による催しは今では世界的なものになっているが、すべての南砺市子どもたちが劇団 SCOT の演劇に親しんでいるかということ、そうではないと思う。演劇鑑賞の地は利賀であり、夏休みなどで利賀に行くタイミングがあれば良いが（なければ難しい）。演劇を市内各所で展開し、市民が演劇鑑賞出来る機会をもっと増やすという試みが大事なのではないか。福野のヘリオスや学校の体育館、自然公園、IOX アローザなど、色々な場所で舞台芸術は出来るだろう。何か進められないか、考えてほしい。同じく 8 ページに「踊り手を市内外から募集」という記載があるが、城端むぎや節と井波木遣り踊り以外に地域文化を象徴する踊りはないのか。例えば自分の周り而言えば、ちょんがれ踊りも文化祭などでは必ず目にする踊りである。具体的に調査してほしい。

また、城端の曳山や庵屋台などの修理や保存について記載されているが、これはユネスコ無形文化遺産や日本遺産に関連するものだけなのか。それには含まれない、各地域の曳山や庵屋台の修理や保存に対する支援についても、文化の継承の中でうたわれるのか。確かに（城端や井波は）ユネスコ無形文化遺産や日本遺産になっているが、そうでないものはどんどん廃れていってしまう。そ

の辺も検討してほしい。

事務局：一つ目の指摘について。先日、福光・遊部地区で茅刈りイベントを行った際に刈安染の話を聞き、作品も見せてもらった。そういう取り組みがあるということが分かったので、どれくらいの広がりがあるかなど、改めて調べたいと思う。福光麻についてもカリヤス染と同様に、調査して計画への記載を検討したい。二つ目の指摘について。棟方志功の物語性が大事ということで、この計画の中にどう落とし込んでいくべきか、検討していきたい。三つ目の指摘について。劇団 SCOT の鑑賞会が利賀以外の地域で行われるということはあまりない。なぜ（利賀の）外でやらないのか、劇団 SCOT にも確認し、出来るかどうかも含めて検討していきたい。踊り手の記載については、城端むぎや節と井波木遣り踊りだけに見えてしまうので、「など」と追記する。四つ目の指摘について。16 ページの記載は、ユネスコ無形文化遺産に関する項目なので、城端曳山祭の保存・継承という内容になる。福野や井波にも曳山や庵屋台があるが、それぞれ（文化財の）指定の種別によって補助のメニューや補助率が異なるため、一概に記載するのは難しい。しかし、城端（ユネスコ無形文化遺産）以外の部分に関しても、何かしらの記載を検討したい。

（資料 2 について、事務局より説明）

- 委員：基本目標(1)、(3)に関する事業案について説明
- 委員：基本目標(2)、(4)に関する事業案について説明
- 委員：基本目標(5)に関する事業案について説明
- 委員：今回初めて（推進ワーキンググループのアドバイザーとして）9 月に行われた第 2 回の推進ワーキングの各部会に出席した。今回の計画改定はマイナーチェンジとなる。これまでの問題点を踏まえて、どういう風に浸透させ、深めていくかという議論が積極的になされていて良かったと思う。今の計画自体に問題があるわけではないと思うが、まだ広げられる部分、うまくいっていない部分があるというような指摘がなされ、具体的にどうしていくべきかという話し合いが積極的に行われていたのが良かった。また、推進ワーキングメンバーが前回の計画策定時と変わっていないようだが、出来るだけ新しい人の声を取り入れていく工夫も必要なのではないかと感じた。理解を広げる、深めるという上で、今までと異なる視点が入れば、新たな知見も加わるだろう。自分もそういう意味で積極的に関わっていきたいと思う。
- 副委員長：自分の地区には市営住宅と民間のアパートがあり、そこには若い世代の人たちもいる。元々南砺市民だが、結婚直後に親と同居せずアパートでしばらく暮らそうという人もいれば、市外からやって来てアパートに入っている人もいる。（若い人たちが）せっかく南砺市で生活しているのに、子どもの伝統芸能や獅子舞、お神輿などへの参加に対する呼びかけや働きかけが、そういう層にはほとんど行われていない。本来のように声かけが出来ないのは、生活の多様化や

核家族化によるのだろう。南砺市で暮らすあらゆる子どもたちを、どうやって獅子舞などに誘い出すか。そういう仕掛けが何かあれば良い。せっかく近くに子どもが住んでいるのに、参加してもらえないというのは勿体ない。学校と連携すれば良いのか、アパートで子育て中の人にどんどん声かけすれば良いのか。現状、仕組みもなければ仕掛けもない。例えば、獅子舞の踊り手募集のチラシを学校で配れるというような仕組みがあれば良いのだが。「子どもが少ない」と言うが、「本当は子どもがいるのに参加させていない」というパターンもある。計画に文章として記載するのはなかなか難しいのだろうか。

委員長：やはり外側の人たちには（参加してみたいという）気持ちはあっても、そういう場に行きづらいというような抵抗感があるだろう。そういう時に（参加できる）場の機会を設けていくというのは大事なことだと思う。

副委員長：移住・定住してきた家庭の子どもは、集落の獅子舞に積極的に参加する。それは親の方にそういう意識があるから。例えば、相倉集落に住みたいと思って移住してきた人は、当然、集落行事にも積極的に関与する。しかしアパートに入る人は、その地区が好きだからそこに住んでいるというわけではない。その意識の差が大きな違いだろう。

委員長：縁があって南砺市で暮らしているのだから、そういう子も幅広く呼び掛けてほしい。情報提供からさらに一步踏み込んだ内容、呼びかけや機会の提供ということは各部会でも話し合われたのだろうか。もしなければ、今の意見もぜひ検討材料にしてほしい。

委員：（基本計画に）SDGsに関する項目を追加するにあたり、個別の事業や内容が実際にSDGsの17項目のうちどれに通じるのか、共通認識を示した方が良い。その事業によって当てはまる項目が異なるが、それを具体的に記載することで、事業主体（団体や地域の人）に「我々はSDGsのこの部分につながる文化活動をしているのだ」ということを認識してもらえと思う。

新型コロナに関する項目について、計画期間は（R3～R7までの）5年間だが、今後5年も新型コロナが続いてもらっては正直困る。来年あたりまでに、ある程度の活動が従来通り出来るようにならないと、地域の文化は廃れてしまい、経済・社会も成り立たなくなる。確かに新型コロナは現在の課題ではある。実施計画の中に「新型コロナとうまく付き合いながら、文化活動を継続していこう」という内容を盛り込んだ、具体的な方策が入っていれば良いと思う。

委員：9ページの事業番号6の中に「文化芸術活動における新型コロナウイルスへの対策方法など、有益な情報の提示や共有も行う」という内容を盛り込んでいる。例えば、井波地域獅子舞連絡協議会では、今季は1団体を除いてすべての獅子舞が中止となった。「来年に向けてどのようなコロナ対策を行えば、獅子舞を実施出来るのか」という情報を協議会のみんなで共有したり、今年の秋に獅子舞を行った平・箆渡地区の事例を学んでみたり、「自分たちはどのように前向きに出来るのか」を団体として考える取り組みを行っていきたい。色々な地域や団

体がある中で、新型コロナへの対応を指示することは難しい。こういう情報を共有することから始めていけば良いのではないかと思う。

事務局：一つ目の指摘について。基本計画の中に、SDGsの17の項目を図示した表を掲載している。総合計画などでも、各事業に対してSDGsのどの項目が当てはまるのか、それぞれマークを入れている。本計画においても、どの項目につながるのか、もっと分かりやすい表記の仕方を検討したい。

二つ目の指摘について。委員に話していただいたことの他に、田中市長の思いとしては（このコロナ禍を）移住・定住につなげていきたいということもあったと思う。それも含めて、表記の仕方を検討したい。

委員長：SDGsを目新しいことのように感じるが、南砺市の生活や歴史の中には、おそらくそれに近い“持続可能な暮らし”というものは元々存在していたと思う。

（南砺の）人々が普通に暮らしている中にSDGsの萌芽のようなものがあり、それをうまくつなげていくということ。SDGsの中に“海を守る”という目標があるが、山がきちんと管理されていなければ（海を）守れない。SDGsという概念が出てくる以前から、SDGs的な暮らしをしていたのだ。新しいものが出てきたというより、生活の中に元々あったのだと認識すれば良い。

新型コロナについては、精神的に結び付きにくい状況になっているが、どうか芸術文化の力（伝統的なものだけでなく新しい文化芸術も含めて）で、心の結びつきやつながりを広げられないか。コロナ禍により露呈した“つながりにくさ”というのを、逆にどのようにつなげていくかというところ。むしろ“危機を乗り越えていく”ということ、新しい生活様式の中でうまく“南砺型”としてイメージ出来れば良いと思う。

委員：全体的な話になるが、自分は砺波出身なので、生まれた時から左義長に携わっていた。左義長はいわゆる“在所”というところで行う地域の行事であるが、それも文化の一つ。南砺市には色々な食文化があるが、最近では食も文化の一つとされ、文化事業としては非常に幅広い。南砺市には色々な文化的財産があり、各部会にて南砺の（文化の）魅力について検討されてきたとのことだが、文化の力を今後盛り上げていってほしいと思う。県知事が変わったことで、文化行政の方向性がまだ見えておらず、どのように取り組んでいけば分からない部分もある。新知事の意向を汲み取りながら、地域の文化や伝統文化の振興など、富山県全体として文化行政にあたっていきたい。

委員：先ほど話があった“文化芸術交流促進ネットワーク”が、色々な面で関わってくると思う。地域を超えた横のつながり、よその地域の人や文化芸術に熱い人などが参加するネットワークが南砺市全域に少しでも広がっていけば、旧体制の文化芸術団体ではなかなか思いつかないような話にもつながっていくかもしれない。そうなれば、非常に価値のあることだと感じる。

もう一点、アーカイブズホームページについてだが、これからはビジュアルが大事になる時代。TSTでは、非常に良い映像素材を蓄積している。60年かけて

各地域の行事や歴史的・文化的な映像などを記録してきたが、絵の構成も上手く、価値のある映像もある。そういうものをうまく譲り受けて、ホームページの素材として活用出来れば良い。TST の社長も協力的だと思う。ビジュアルが良いものでないとなかなか見てもらえないので、そういうところから関心を持ってもらうために、そういうものを利用すれば良いと思う。

4. その他

(資料3について、事務局より説明)

(資料4について、事務局より説明)

委員長：次の策定委員会は、年末年始あたりというイメージで良いか。

事務局：その予定である。

委員：直接的にこの計画に関連することではないが、この1年間、色々な行事が新型コロナの影響により中止となった。文化活動やスポーツ活動など、すべての活動が中止となったと言っても過言ではない。このままの延長線で年明けを迎えると、こういう状態がまた続いてしまう。やはりどこかで指針を出してもらいたいのではないか。現在は、各地域の獅子舞保存会など、実施団体の判断によって中止が決められているが、「この行事はこうすれば開催出来る」という指針を出してほしい。各事業主体が自主的に判断すべきものではないと思う。行政か地域づくり協議会か、どこかである程度指針を出してもらわないと、来年もまた色々な事業が中止となり、地域の活力がますます失われてしまう。これが先ほどからの、新型コロナに対する課題であろう。

委員長：冬を迎えるということで、これからどうなるか先行きが見えないが、(新型コロナと)うまく付き合っていく必要がある。計画の話とは別になると思うが、また検討いただきたい。

5. 副委員長あいさつ

副委員長：色々な意見を出してもらい、非常に良かったと思う。次回の策定委員会にて内容がほとんど決まり、その後すぐにパブコメに入る。そういう意味で、第3回の策定委員会が非常に大事になってくる。次回の会議まで少し時間があるので、改めて計画を熟読していただいて、おかしな点や書き足りない点などについて、事務局にご意見いただければありがたいと思う。本日はありがとうございました。

6. 閉会